

DOLL FORUM JAPAN

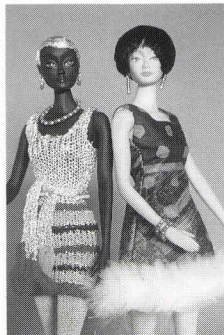


DOLL FORUM JAPAN
ドール・フォーラム・ジャパン
NOVEMBER 1995 Vol.7

人形制作 たがわまさき

ビリーボーイのニューモデル イーディーとズーリィ

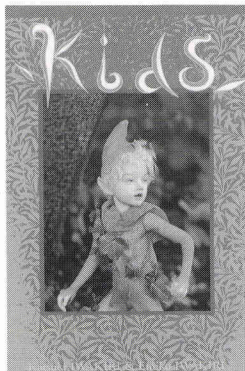
前号でご紹介したソラヤに続く、ビリーボーイの新作ティーンエイジ・ガールドール。全身ハンドメイドのポーセレン製限定品。シックでグルービーなファッションと共に70年代のヴォーグ・スタイルを反映している。イーディーは東洋文化を勉強する学生で趣味はエレキギター、ズーリィはアフロ・ヨーロッパでアフリカ文化を研究しながらモデルをつとめるという設定。25cm。今秋より発売開始。
問合せ：エス・ダブリュー・ジャパン
東京都世田谷区三宿 1-28-4
☎ 03-5481-2025 fax 03-3419-8606



岩切夫妻の写真集発刊

岩切克樹&映幹子作品集「KIDS」

岩切克樹、映幹子両氏の初の写真集。テーマは「KIDS (こども)」。“木陰で読書する少女と森の妖精” “野球をすることも達” “黒いドレスの少女” 他。貴重な初期作品から最新のものをまでを収録。コンパクトサイズで贈り物にも最適。
全64頁 (オールカラー) 定価1700円 (本体1650円)
11月下旬より全国主要大型書店で発売予定。
問合せ：(株) 同文書院
☎ 03-3812-7777



◆人形の風展 '95

12月14日～23日 (12:00～19:00 *最終日17時まで会期中無休)
大学堂ギャラリー 大阪市中央区心斎橋筋1-5-18 大学堂3F
tel 06-243-9151 出品作家：粕川雅子 (埼玉)、原明代 (大阪)、総野美代子 (大阪)、福田朝子 (埼玉)、京谷安子 (大阪)、水無川リナ (大阪)、河野滋子 (奈良)、宮崎淑子 (奈良)、小松靖治 (埼玉)、森小夜子 (京都)、たがわまさき (大阪)、山下加代子 (大阪)、永嶋すみ子 (大阪)、山下沙衣 (大阪)、林喜代志 (愛媛)

*大阪で行われる恒例の創作人形展としては最大規模

◆加藤弘子個展 (写真)

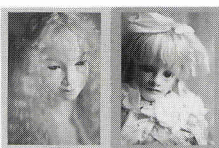
96年1/30～2/5 (11:00～19:00 最終日16:00)
ギャラリー・ドゥ・シャルム
東京・銀座東芝ビル地下1F
tel 03-3571-7688

*球体抱き人形、ポーズ人形、創作文楽人形など23体
出品 姉の仏像作品も賛助出品

◆Bee & 山下真智子二人展

96年2月25日～3月2日
ピガ原宿画廊 (同潤会アパート / 東京原宿)
tel 03-5411-1428

*関節人形、オブジェなど



DOLL FORUM JAPAN

NOVEMBER 1995 VOL.7

CONTENTS

- 表紙 人形制作 たがわまさき
- インフォメーション・スケジュール 2・3
- 近況報告 藤井路以 4
- Review 展覧会より 5～7
 - 石井美千子・水澄美恵子・UAL 美術展
 - 佐々木悦子・中野律子・佐々木明子
 - かぐや姫の会・中西京子・森小夜子
 - 奈里多究星・林純子・アトリエアイドル
 - 岩切ドール教室・大八木由紀子
- Coming on the Scene (新人紹介)
 - ポエティー・パーティ 8
- 人形気分 第1回 5%の向こう岸
 - 文・青山恵一 9
- カバーインタビュー たがわまさき 10-13
 - インタビュー・文 小川千恵子
- ゲイルからの手紙 文・ゲイル・エニド・ジマー 14
- お化け屋敷店長日記 第3回 怒りの鉄拳 15
 - イラスト・文 摩宮ピノン
- 人形つれづれ 第7回 文・福島弘太郎 16
- 大島和代の世界
 - 文・ソランジュ・ストラウツィンスキ 17～19
- レポート・日米ドールアート文化交流事業 20～21
- トピックス・DFJ ワークショップ報告 22
- LETTERS 編集後記 23

ドール・フォーラム・ジャパン

1995年11月24日

ドール・フォーラム・ジャパン事務局発行

ドール・フォーラム・ジャパンは日本のアーティスト
ドールを支援するためにつくられた情報誌「ドール・
フォーラム・ジャパン」の購読会員による非営利の組織
で、購読会費とユーラシア・ドールズのスポンサーシップ
により運営されています。

*営利目的のお問合せには応じませんのでご了承下さい。

SCHEDULE & INFORMATION

■ イベント

ドール・パーティ・イン・カンサイ 関西地区の人形作家&ファン集まれ!

(もちろん他の地域もOK)

楽しくておいしい人形展 大阪・京都にて同時開催

今号表紙に登場のたがわまさき氏の居酒屋ギャラリー「游花舎」(ゆうけや)と昔人形館青山による企画。2月5日から25日まで游花舎と昔人形館青山で自作を展示しませんか? (各会場2体まで)

2月11日にはドールアートを肴に「游花舎」で、気軽に美味しいお酒、料理、おしゃべりを楽しみましょう。DFJ編集長の小川千恵子も参加予定。

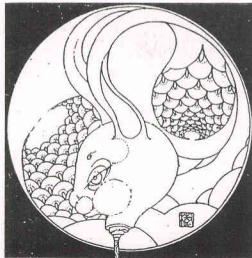
◆人形展期間 2/5~25

会場 昔人形館青山・游花舎 (出品料無料・販売手数料20%)

◆パーティ 2月11日(日) 14:00~18:00 游花舎にて
参加費一万円 (要予約・先着順に締め切ります)

問合せ: 昔人形館 青山 京都市北区小山東大野町 69

☎ 075-415-1477 (午後1時~7時・無休)

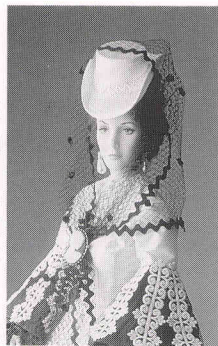


サンタフェ・ドールアート - 人形美の祭典 -

1996年4月18日~21日

今年から始まったドール・アーティストによる大会。来年度は「エクセレンスのシンポジウム」をテーマに今年より規模を拡大して開催される。3日間の日程中、講義、講習会、コンテスト、パーティ、ドールショー等が行われ、DFJ編集長の小川千恵子も日本の作家と活動、市場について講義をする。講習会では人気作家のモニカ、リンダ・メイソンなど。

◆DFJツアープラン (7泊8日) 4/16成



田発サンフランシスコ (予定) 自由行動

2泊/18日よりサンタフェへ移動、ドール・アートに参加/22日現地発/23日帰国/費用約17万円 (飛行機・ホテル・ドールアート基本参加費のみ含む) 添乗員は同行しませんが、小川が同行します。

コンテストや講習会などに参加される方は別途登録料が必要です。

申込締切: 1月末日 問合せ・申込: DFJ事務局

■ 講習会

DFJ ワークショップ 「サーニット集中講習会」

好評につき、再度実施します。今回は手、足をつくる中級クラスもあります。

1月14日(日) 10時~16時 初級クラス
「顔の作り方」

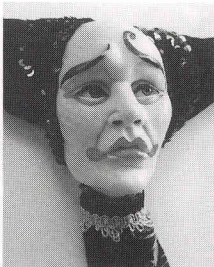
1月15日(月) 10時~16時 中級クラス
「手・足の作り方」

講師 黒川早恵美 会場: ミワ・ドール工房 (東京都世田谷区砧2-17-7 Eスペース4F)

*中級クラスの方は初級クラスの講習を終えられた方が対象です。22ページのワークショップの報告も併せてご覧下さい。

各日10名まで (先着順締め切)・受講料12000円 (材料費別)

問い合わせ: DFJ事務局、またはミワ・ドール (☎03-3415-3819)



■ その他

DFJ 写真展 (荒木野馬写真展)

東京・水道橋にあるアテネ・フランセで開かれる3度目のDFJ写真展。今回は荒木野馬さんの

作品が紹介されます。

11/15(水)~12/12(火) (10:00~20:00) 日・祭日休み
アテネ・フランセ

東京都千代田区神田駿河台2-1-1 地下1階学生ホール (JRお茶の水駅または水道橋駅より徒歩7分)

■ 展覧会

アートギャラリー セ・らへる

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-52-3 黒川ビル3F

☎ 03-3478-5230 (無休 12:00~20:00)

12/12~12/20 人形グループ「クリスマスあそび」展

'96 2/12~18 石塚亜希子人形個展

3/17~24 渡辺朋人形個展

4/2~15 吉田良一教室展 (前・後期)

昔人形館青山 K1 ギャラリー

〒603 京都市北区北大路室町南入ル小山東大野町 69 番地

☎ 075-415-1477

11/25~12/5 飯塚誠太郎 創作人形展「清雅」(*写真)

12/6~14 河野滋子 創作人形展

12/16~12/25 白藤千枝 創作人形展

'96 1/11~1/25 水澄美恵子創作人形展

2/5~2/25 ドールパーティインカンサイ (with 大阪ゆうけや)

2/17~2/18 小松靖治 ちりめん細工教室

*アピールボックス

11/1~1/31 村上初子・杉本真理子・たがわまさき

2/1~4/30 山口景子・菊池さなえ・大槻和子

♥「昔人形館青山ギャラリーK1」と「創作人形アピールボックス」ただ今予約受付中 (使用料無料) ささやかなスペースですが、ご自由にお使い下さい。

個展・グループ展

◆バンボーラ高橋節子創作の世界

(第1部) 11/29~12/5 *従来の代表作品に加え、中近東の華やいだ衣装の中に民族の歴史の重みを表現した作品など人形の世界

(第2部) 高橋節子と12人展 12/6~12/12

*高橋節子と門下生12人の作品を展示、クリスマスの人形も展示

西武池袋店5階 スタジオ5

東京都豊島区南池袋1-28-1 TEL 03-3981-1111



◆吉田良一個展

従来作品に加え新作数点を展示

12/4~16 (10:30~18:00)

青山ギャラリー アメリア 港区青山6-13-26 Aポイント2F

tel 03-3400-3663 (10:30~18:00)

◆昔人形コレクション '95 名古屋展

12/8~10 (10:00~18:00)

中京画廊 名古屋市中区栄3-4-20 tel 052-241-4008

*アピールボックス 佐々文子、斎藤志保、三井朱実



媚薬売り ズッケロの口上
(石塑 人形約60cm)



藤井路以

今年春に終了したNHK教育テレビの「マホマホだいぼうけん」で人形美術を担当した藤井さんは、続いてこの11月に放映されたNHK人形ドラマ「川辺のなかまたち」(グレーム作)を担当した。多忙な中、じっくりと人形作りをしたいという希望を持ち続けている。

REVIEW

展覧会より



森小夜子



水澄美恵子



石井美千子



中西京子



大八木由紀子



小林三千子 (かぐや姫の会)



佐々木明子

石井美千子

昭和の子供たち 石井美千子人形展

大阪・阪神百貨店

八月十日〜十八日

昭和三十年代のぬくもりと活力に溢れた人々の暮らしをテーマとする石井美千子さんの集大成である。四二タイトル、百六十体の人形たちが、当時の様子を伝える新聞、映画ポスター、テレビCFや、五十嵐八十男氏の写真等で、ジオラマ風に展示されており、いつもの人形展にはない規模の大きさに、最初は戸惑う。「原っぱ」「行商」「紙芝居」等のコーナーの中でも圧巻は、今回の展示のために制作に五年を費やしたという「嫁ぐ日」で、質素な暮らしの中から花嫁を送り出す喜びが、見送る大勢の人形たちと伝わってくる。異色な作品としては「街娼のむれ」が、善意の表情ともいえる他の多数の人形たちの中にあって、そのふてくされたすれつからしの顔つきで、一針の毒ともいった新鮮さを持ち、今後の広がりが感じられた。

出品された桐型人形の説明中「胡粉に自信がもてず、和紙を張ったら温かみが出た」との素直な言葉も好感だったが、時代設定とは別の意味で、いづれの人形も滑らかに垢抜けていて、まさしく「今」を生きる作家の作品であることを伺わせてくれる。

戦後五十年目の八月というタイムリーな開催で、普段の人形

第三回 UAL 美術展

東京都美術館

八月二日〜三〇日



展には見られない顔ぶれの参観者で会場は賑わっていた。テーマが普遍的で大きな分、単なる説明手段としての人形に見過ごされてしまう危惧もあるが、思いつく作者の個性に触れ新たな人形ファン誕生のきっかけになるかもしれないし、広く人形と接してもらう機会ととらえれば最初の戸惑いも納得できる。(A)

水澄美恵子

江戸庶民さてて展

ギャラリー旬(東京・広尾)

八月二日〜二八日

通常、水澄さんの作品というと、静かだが見るものの心の奥を刺すような独特の表情の閑静な人形を連想するが、今回は本人もリラックスして作ったというように粋でユーモラスな江戸庶民の生活ぶりが伺える小品でまとめられた。作品は全てポーズ人形で15〜25センチくらい。大工や女中、番頭、職人などさまざまな職業の人物のポーズは表情豊かで、それぞれの人形の胸の内が聞こえてきそうである。こういう人形は苦にならず、楽しみながら早くできてしまうとのことだが、湧き水のごとく溢れるのではないかと思えるユーモアとアイデアに、従来の水澄観の修正を迫られた。伝統工芸品と現代感覚が上品に調和した和風の空間で、古製の柄あわせを見るだけでも楽しい縮緬張りの人形は、それぞれの時代の瞬間に息づいていた。

戦後五十年目の八月というタイムリーな開催で、普段の人形

年に一度ユネスコ美術教育連盟の主催で開かれる在日外国人芸術家と日本人芸術家の合同展。ジャンルを問わない無審査の自由な展覧会である。人形作家も例年より多数の参加があった。ユニークな造形で親しまれる黒沢正子さんの革人形は「傘をどうぞ」(写真「落ちちゃった」等のカラフルで現代的な雷小僧のシリーズで、従来の抽象的なテーマの作品とは異なるコミカルな内容で、好評を博していた。ジャンルやレベルが交錯する展覧会で創作人形を見るのは面白いが、このような展覧会では、他のジャンルと並ぶだけに独創性や世界の広がりをより望みたい。人形関係の参加作家は：赤川ボンズ政由、さとうその子、黒沢正子、稲辺智津子、すぎきすずよ、菅沼有美子、榎本恵美、大槻和子、山田富子、坂井篤子、早川淳子(敬称略)。

佐々木悦子

創作布帛(ふうめん)ドール作品展

横浜人形の家

八月二九日〜九月三日

布の人形を作る人には、まず自分が楽しんで作るという共通項があるらしい。上手く見せようという気遣いよりも、作者の人形に対する慈しみが形になる。布帛(ふうめん)という言葉も、布だけの造形は難しいといながら布と綿で作ることにこだわった佐々木さんの造語である。会場には群像を中心に佐々木さんの十作品に教室の生徒十人の作品が出品された。



佐々木さんの作品にはそれぞれにほのぼのとしたストーリーがあるが、昨年の大統領選挙での南アフリカ共和国の黒人の子供達を描いた「僕たちにも未来が」のような社会的なテーマにも挑戦する。一つとして同じ人形はなく、それぞれに表情がある。今回出品されなかったが、試合に負けた子供の様々な表情が秀逸の「サッカー」をここで紹介したい。(C)

中野律子

クレイ・ドール展

立川高島屋クリエイティブ工房(東京)

八月二日〜九月二日



童話の世界のシーンや抱き人形を創作し続けてきた中野さんが、今回はじめてドールハウスに挑戦。七十点を展示した。マイルームと称する異なるタイプの部屋のセット、小さな箱に入った五センチ大の華やかな人形、編み物をするおばあさんなどそれぞれに、この作者の特徴である素朴で伸びやかな愛らしさを感じる。写真は、本人も今回の中で一番気に入っているペイネのイラストからの小さな人形である。(C)

佐々木明子

井上ギャラリー(大阪・心斎橋)

九月七日〜二二日

会場にはいると同時に元気一杯、表情豊かな人形たちに迎えられる。彼女の得意とする子供の表情は作者の手柄を反映してあくまでも明るい。糸一本で目の表情、口元の表情を作り上げていくテクニックの可能性を、今回の作品でさらに追求し

かぐや姫の会

三ツ折れ人形展

竹取物語(東京・目白)

九月二十四日〜三十日



竹取物語が開業当時よりこだわっている抱き人形の中でも、三ツ折れ人形に焦点を当てかぐや姫の会の作家が競作した。竹取人形学校の講師としては小林三千子さんが昭和初期の子供を思わせる個性的な作品を(五頁)、宮崎優人氏は胡粉からピスクドールの肌合いを感じさせる市松人形を作った。正座することのできる三ツ折れ人形に文化を感じるといふ宮崎氏は、江戸時代の抱き人形を現代にあっ

ているかに見えた。仲の良い老夫婦、木立の中を遊ぶ冬の精の子供達、今時のファッショナブルな少女達の群像、と作品のバラエティーにも富み、これからの活躍が期待される。(L)

たかたちで息づかせたいと考え
る。展示された三ツ折れ人形は
基本として市松人形であるが、
大きな素材、髪の色など自由
で現代風である。選り抜かれた
作家だけあって、どれもが愛ら
しいながら丁寧な仕事であり、
竹取物語のクオリティの高さ
を感じさせる。参加作家：上滝徳
子、木谷洋子、斉藤玲子、高橋
田鶴子、田野宣子、仲沢喜代
子、平井幸子（敬称略）（○）

中西京子 和紙人形の世界展

大丸（大阪・心斎橋）

十月十八日～二十四日

こんなにやわらかな糊をかけて和紙を丈夫な「紙衣（かみこ）」にする伝統技術を蘇らせ、和紙人形の造形に大きな可能性をもたらした中西京子さんのこれまでの集大成ともいえる展覧会である。体や衣の躍動感あふれる描写、華やかな色彩は中西和紙人形の大きな特徴であり、それは歌舞伎の連作や花を擬人化して表現した一体ものの作品によくあらわれている。弟子の力作も同時出品されたが師の道を踏襲し、確実に自己の世界に展開しているようである。

わかりやすさ、エンターテインメント性も、中西和紙人形が広く人気のある重要な理由である。ジオラマの代表作「江戸時代の芝居小屋」や九五〇体もの人形を配した「中世国際自由港、堺」など、見る人誰もが嘆息をもらす。夫君の弘光氏とのプロジェクトにより今回のような百坪以上の展示を数多く手がけて

きたそうだが、作家自身により
これだけの規模の仕事ができる
作家は希であり、今後の作家の
指標のひとつとして、その作品
と活動に注目していきたい。
（○）

森小夜子

森小夜子の世界展

ギャラリー妖精村（京都）

十月十日～二十二日

NHK婦人百科の講師として活躍した森小夜子さんの個展は、イラストレーターの水田萌さんのギャラリーで開催されていた。水田さんのイラストとも呼応するところがあり、二人展を開催したこともあるようだ。今回も人形と対話するように水田さんのイラストも数点展示されていた。作品は主に八年前より手がけているシルクロードのテーマで、新作十点を含む三十点を展示。石膏に布張り、手足はボーズがつけられる。エキゾチックなムードの中にも日本人形の持つ優しさがある。京都嵯峨野のアトリエナカフエテラス「アイトワ」の展示室では森さんの作品が常設されているそうである。（○）

奈里多究星

人形個展 月

せ・らるる（東京・原宿）

十月二十一日～三十日

月をテーマに、ピエロだけをレリーフや人形数点で構成。哀愁漂うピエロに対して、小悪魔的でいやらしいイメージの提示

を試みた。中央に白、奥に青を基調とした二体の等身大のピエロ人形のコントラストが会場の中心となっている。今回の個展は全体の色として白にこだわったそうだが、意表を突かれたのは、マチエールとしての面白さから初めて扱ったという脱脂綿があらわれた人形やレリーフ（写真）。衣装や羽の表現が面白い。即興的に作品を仕上げられることで楽しめた素材だったそうである。（○）



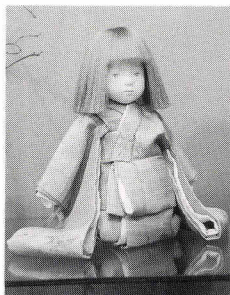
林純子

林純子の人形遊び展

竹取物語（東京・目黒）

十月十八日～二十七日

竹取物語の作品展、かぐや姫の会の一二回目として行われた林純子さんの初個展。林純子さんは人形作りを小林三千子さんに師事し、制作を始めて七年あまりになる。おっとりとした印象の奥に神経の行き届いた仕事を感じられるのは、師である小林さんと同じである。林さんは、着せ替えが好きで、12センチから25センチ大の人形の二つの服を手編みで作ることから始まり、今は着物つくりを楽しんでいる。人形は桐葉布張りで、小さいものは三ツ折れだが、他は



関節で自力で立たせることができるように工夫をした。つづらな瞳に団子鼻がかかった顔が特徴的で、愛らしい。（○）

アトリエ・アィドール

創作市松人形展

すべくす小倉屋（東京日暮里）

十月十七日～二十二日

人形作家の島村龍児氏が率いるアトリエ・アィドールの作家がはじめて市松人形だけをテーマに作品展を行った。会場となったのは東京の下町、谷中で江戸時代に質屋だった家屋をそのまま利用した趣のあるギャラリーである。島村氏は以前から、靴を脱いで時間に追われずに鑑賞してもらえようという人形展をしたかったというが、氏の



意図を完璧に満たす会場でありしとやかなアィドールの雰囲気にもびつたりである。三つの和室に二十人の作家が一体ずつを展示、テーマが一つであるだけにそれぞれの個性が比較できた。来年の桜の季節には同会場で島村氏の個展「男と女」が開催される。（○）

岩切ドル教室展

ギャラリー田村

十月十九日～二十八日



岩切夫妻が今春宮崎に転居後、教室を東京で引き継いだ弟子の田村涼子さん、横田早苗さんの作品を展示。自宅をかねて教室・ギャラリーの紹介もかねて開催された。参考出品された岩切幹子さんの作品の中では田村さんを模した珍しい肖像人形があった。今後が期待される横田さんも新作を発表、またミニチュア家具も作る田村さんの力作、麻雀をする家族も表情が豊かで、団らん風景が伝わってきて楽しかった（写真）。（○）

大八木由紀子

大八木由紀子人形展

GOKURAKU亭（鎌倉）

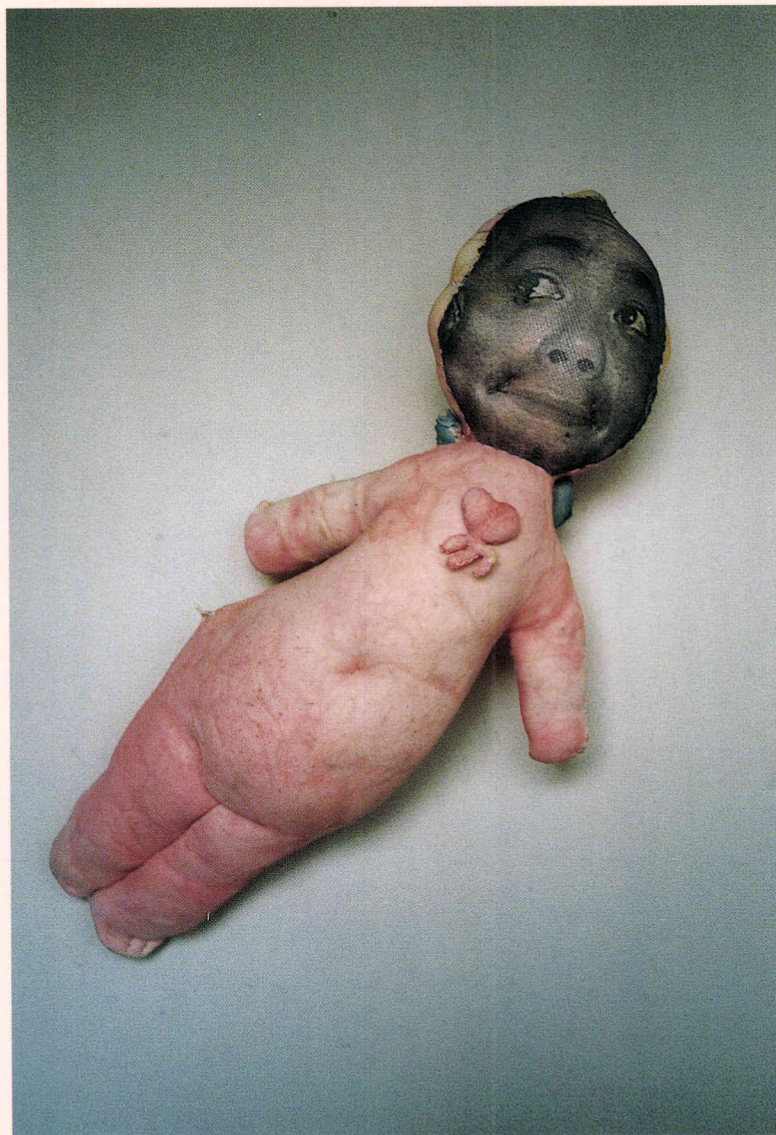
十月二十日～二十五日

大八木さんの木彫人形展は、鎌倉極楽寺そばの小さな骨董喫茶店で行われたが、五〇点にも及ぶ作品と、飼猫のスケッチ数点からの多才ぶりは、本人がいう「趣味」の範囲のものではないようだ。実際、新芸展や県美術展で入選・受賞をする実力である。大八木さんは木彫作家の友永詔三氏に師事以来二十年間木彫の制作を続けているが、その経験と、独自の発想・デザインユニークさは各作品によくあらわれている。飼猫を描写したシリーズや、東西の童話を大胆、ユーモラスに描いたシリーズ、また友永氏の曲線美を彷彿とさせる一刀彫りの美しい女性像など、作風は幅広い。作品はほとんど無彩色である。

木で彫られたものには自ずと魂が宿っているような不思議な錯覚を感じると同時に、独得ののんびりとした印象がある。大八木さんはそのような木彫の魅力を独自の世界に展開している。五頁で紹介している作品は少し以前のもので、今は木目の美しさを直接造形に利用できる一刀彫りに集中しているようである。（○）

ポエティーパーティー

(仲里秀樹・野口千佳)



N.KEWPIE



GOOD MORNING SOL

彼らにとってのキュービーは上の写真である。京都を中心に活躍するポエティーパーティーという二人組のユニットから資料を送られてきたとき、その得体の知れない、気色悪い物体としか思えないぬいぐるみのようなものの写真を見て、衝撃を受けた。彼ら自身、これらの「作品」をNOGOOMMY(ヌグーミー)と呼び、時には左の写真のようにヌグーミーになって、ショーとして歌ったり、踊ったりすることもあるのだそうである。彼らの作るヌグーミーは概してホルマリン漬けの内蔵と通じる印象があり、生殖器を過度にデフォルメして表現しているものが多い。それを携え大衆の前に出現するというのだから、当然拒絶反応を示す人もいる。彼らのそういうやり方は、70年代のサイケデリックな芸術が好んで観客を巻き込んだり、挑発していたことを彷彿とさせる。あらゆる表現形態が交錯する現代においても、彼らは異端足り得る強烈な個性である。最近ニューヨークに赴いたそうであるが、かの地の人はこの生々しさとキュートさが混在したソーセージ風の物体やパフォーマンスを見て、いかに反応したか、報告を楽しみにしている。(小川千恵子)

人形気分

文 青山恵一

今号より昔人形館
青山（京都）の店長
である青山恵一氏が
人形をめぐる思いを
綴ります。



連載第1回

5%の向こう岸

「人形ブームですね」と、時々云われる。人形専門の古美術商として二十年近くやってきたが、近頃、同業者の転業は聞いても、ビルを建てた話は聞いたことがない。「いえ、創作人形の」と付け加えられて納得するが、正確には、その時期は少し過ぎた。カルチャーセン

ターブーム全般にいえることかもしれないが、バブルの隆盛と崩壊は、創作人形のそれと一致する、いづれも残るものだけが残った。玉石混合の時代を経て、催しの数こそ減ったが、残る者だけが残ったのだから近頃の創作人形の個展は、見応えのある内容が多い。遅れてやってきたかに見える「D・F・J」の創刊も、だからこそ機を得ている、といえる。「昔人形青山ギャラリーK1」という長い名前前の小さなギャラリーを店奥に併設し、創作人形に関わって七年になる。はからずも新旧の人形を扱

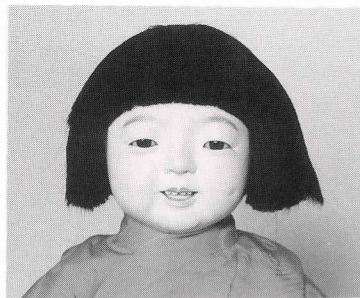
うことで見えてきたことも多い。

その一つに、昔も今も、人形が第一線の美術品として扱われたいことへの疑問があった。しかしギャラリーで人形作家の方々の制作の苦勞を伺って成程と思った。人形は総合芸術だったのだ。日本

人はエン

タータイム
ントは苦手
である。単
品主義、こ
の道一筋が
好きであ
る。役者一
筋五十年、
生涯一捕手
なんてのが大好きだ。もとより人形の制作は、彫刻の部分、絵画の部分、衣装の部分、他にも髪や眼球の制作手配等、五指に余る、それは一人で家を建てることにも似ていて要求される能力も各々違う。

もちろん、人形が第一線の美術品として扱われ



なくとも不都合はない。愛玩品というもつと大切な役目がある。他にも佐野川市松の時代はプロマイド代わりでもあったし、流行を伝えるファッションドールでもあった。「ひとがた」の時代から数えれば、人形は用途においてもまたエンター

テイメントであつた。

人形作りを始めたばかりの人が、思いの他に短時間である程度の水準までの作品を作つてしま

うのは、先程の各々の能力をそこそこに使えば、相乗的に完成品に表れるからである。立体的で色彩的で表情まであるのだから、作つた人の満足感も大きい。しかし、そこ

らが難しい・・・ユーミンに「5cmの向こう岸」という曲がある。恋人の男の子より5cm背の高い女の子の悩み

を歌つたもので、大切なのはハートだと分かつていても「若い時には見た目の方が大事な時もある」との歌詞がつく（と、ここまでは余談）。

例えば数字に直せるものとして、絵画の場合、その人の絵が5%上手くなれば、5%向上したといえる。しかし人形は一つの部分の向上だけでは評価にならない。先程の五指に余る能力が各々5%向上して初めてやつと、その人の人形が5%向上したことになる。総合芸術の所以である。

人形展に出かけて、その人の人形が5%良くなっていると思われた時、その人の五十倍の精進に拍手を送るべきである。しかし「5%の向こう岸」にたどり着かずに去っていく人も多く見

きた。ここでも、残る人だけが残った。

写真上・昭和初期のビスクリ
写真下・大正時代の生き人形

たがわまさき

■これまで

小川 たがわさんの情
報って、ミステリーに包

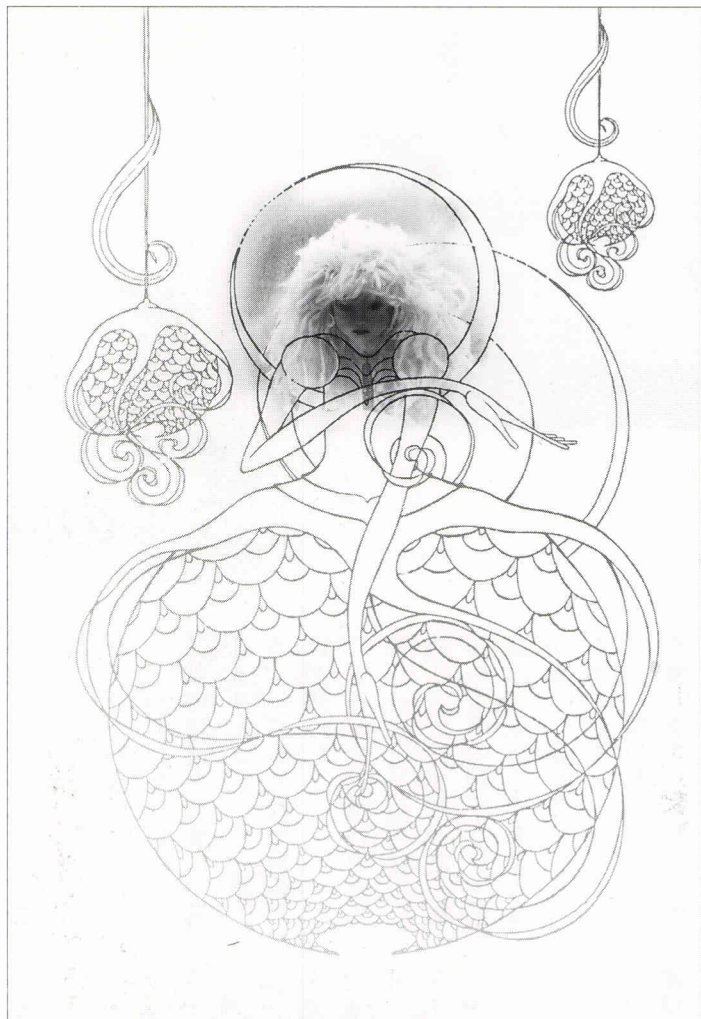
んじゃないか、って言わ
れているんですけど、
そうではないんです。で
も、人形作家って、謎に
包まれている方がいいん
じゃないでしょ

うか(笑)。

小川 そうです
ね、確かに(笑)。

でも、どうして
人形を作り始め
たのかお聞きし
ても良いでしょ
うか。

たがわ 僕は人
形を好きで作り
だした訳じゃな
いんです。作り
出せば、面白い
ですけれどね。
最初はデザイン
の仕事をしてい
て、立体も仕事
としてその時始
めたんです。二



インタビュー・文

小川千恵子

まれているようなんで
す。居場所が分からない
とか、あまり人と会いた
がらないというようなこ
とをよく聞きました。

たがわ そうみたいです
ね。人形を止めちゃった
とよく聞きました。

小川 ああ、そのころは
既に(辻村)ジュサブ
ローさんなどがいました
よね。

たがわ いや、知らな
かったんです。自分で展
覧会などをしだしてから
案内や情報が入ってくる
ようになって、ジュサブ
ローさんなどを知りまし
た。

小川 では、布貼りのス
タイルも自分で始めら
れたのですか？

たがわ ええ、最初から
このスタイルです。今も
そうですね。多少技術的
には進歩していると思っ
ますが。

小川 縮緬を張っている
のでしょうか？

たがわ いえ。半分くら
いは古い布で半分くらい
は新しい布です。ちよつ
と古っぽくしたり、色が
あせて見えて面白いので
新しい布の裏を使ったり
しています。

小川 顔も張っています
か？

たがわ 張っています。
他にアクリル絵の具を
塗ったりしています。

小川 本体はどのように
なっているんでしょう
か？

たがわ 桐の木を使っ
たり、桐塑に樹脂系の糊を
混ぜています。

小川 素材から見ると伝
統的な人形を手本にされ
たのでしょうか。

たがわ そうですね、や
はり人形がどのように出
来ているのかなって、市
松人形などを見たりしま
した。

小川 樹脂系の糊を使う
わけは？

たがわ 桐塑に膠を使わ
ず、樹脂系の糊を使い熱
を加えると、強度と柔ら
かさがでるんです。

小川 その他の装飾的な
部分は？

たがわ 金属やナイロン
やアルミなどを使いま
す。アルミは軽いし、補
正がききます。例えば兎

の耳を浮かす状態にするのにも、アルミを使っています。飾りにナイロンストッキングなども使います。衣装は縫うのが苦手なので、張り付けが中心です。

小川 個人で東京で展覧会をなさったのは九二年の新宿のせ・らゝるだったんですね。あと、大阪では心斎橋の大学堂ギャラリーでの人形展によく出されていますね。

たがわ ええ。大学堂は今年も一二月にやりますね。あと昔人形青山さんでの個展もあります。僕は人のしないものを作っていますし、作品もあるからよく話がくるので、いつも企画でやらせてもらっています。

小川 展示できる作品があるという事は、お売りにならないのでしょうか。

たがわ いえ、作るのは、早いみたいですから、結構はたばたと作ってしまう・・・。また、全

部売れませんし。ただ新作だけでやる、という考えがあまりなくって。自分あまり好きで作っているわけではないので・・・。

小川 そうなんですか？

たがわ 商品的な感じ？だから多いときで年に十

ですね。そういう話がなかったら結局人形を作らなかつたのではないかと思います。

小川 でもそのまま作り続けたというのは？

たがわ まあ、やっていたら結構面白いですし。自分の気持ちとか考えが



回くらいの展示なんかもできたんだと思います。

小川 最初のきつかけがデザインのお仕事として依頼されてお作りになったという事でしたが、最初からビジネス的な感覚でお作りになられたという事でしょうか。

たがわ そう・・・、そう

出せますし。

小川 人形以外にも、今まで色々なことをおやりになつていたようですね。

たがわ ああ、彫金とか七宝とか。人形作りに適していたんでしょうね。

小川 人形とは総合的な表現ですからね。

たがわ ええ、そういうのを色々やっていましたから、結構人形は簡単に出来たんじやないかと思っています。

■制作のテーマ

小川 最近の心境を表した作品などがありますか？

たがわ 僕は自分の考えでやってきてますので、昔からあまり変わっていないんです。多少技術が進歩した程度で。自分の古い作品を見るのは好きですね。新鮮味がありますから。

小川 進歩するのは技術だけでしょうか。

たがわ ごまかしかたが上手になりますね(笑)。それが進歩みたいなものなんでしょうか。

小川 制作に当たって、表現したい世界というのがあってはないかと思うのですが？

たがわ 自然、でしょうか。自分を自然に出すと

いうか、今まで生きてきた考え方を形に変えて出しているんですけどね。人形にも名前なんかつけませんし。環境としての自然も、植物とか、魚、虫などをイメージして作ります。

小川 このところ制作を中止されていたのは何か訳があるのですか？

たがわ このお店をやっていたから。

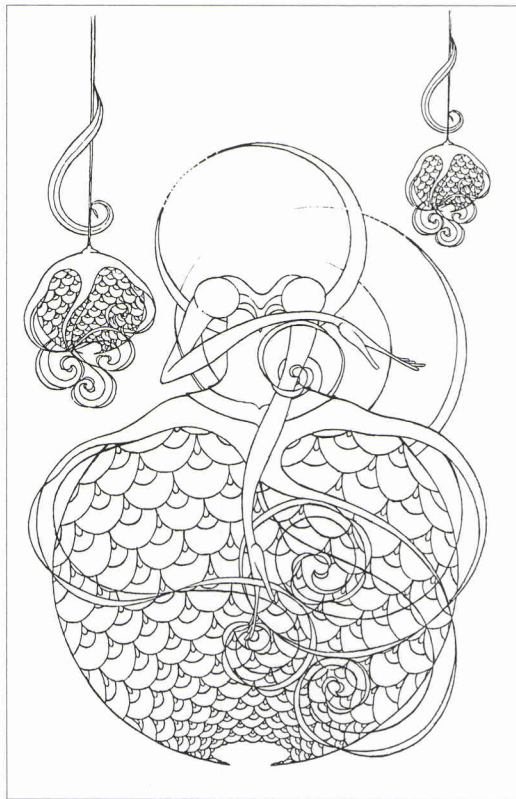
小川 それだけですか？

(笑)

たがわ それだけです(笑)。いや、活動というか、うちのお客さんは、ユニークな人沢山いてますから、ポストカードとか渡して宣伝などはしていたんですけど。店を始めて一年くらい作っていなかっただけの話なんですけど、僕が止めたとかいう噂を聞きました(笑)。

小川 私も風の噂でそう聞きました(笑)。お店でユニークなお客さんというの、芸術的な方が多いということでしょう

この頁のイラストはたがわ氏自身が、
前頁の人形からおこしたものの。さらに
その人形の頭部の写真を合成したのが
10頁のイラストである



か。

たがわ そうですね。そう
いう関係の方が多く来ま
すね。

小川 お店の方で人形を
飾るといようなこと
は？

たがわ この六月から

なんででしょうか。

たがわ ただ、やりた
かったし、生活上のこと

もありますし。人形だけ
では食べてはいけません
し、それ以上の何かをし
なければ。人形が売れて
も材料費などで消えてし

ギャラリ-的に月交代で
展示することを考えた

んですが、突然決めたこ
とです。夏はやる人が
なかったの、八月は自
分の展覧会を急遽したん
です。

小川 この、食べ物やさ
んというのも一つの表現

まいりますから。

小川 他の人形作家で面
白かったとか気になった
人などはいますか？

たがわ 能津さん（*）
が面白い。

小川 ああ、彼女は面白
いですよね。あの方は今

お作りになつていないん
ですよね。残念なんです
が。

たがわ 人形だとあまり
興味のわく人はいない
な。彼女はたまたま身近
にいましたから。

小川 かえって刺激され
るのは、他の芸術作品と
か？

たがわ そうですね。美
術館でみる作品とか。別
に人形を避けているわけ
ではないんですけれど
も、他のものに興味が
あつて、そこから結構刺
激を受けますので。僕は
人形をオブジェ的に考え
ていて、たまたま作品が
人の形をしているという
事なんだと思います。人
形ということでグルー
プ展などにもでています
から人形師とか作家にな
つてしまつていますので
が、何回かは人形を入れ
ていない展覧会もしてい
るんです。

■球体関節

小川 球体関節の人形

は、作る人がとても多い
んですけれども、どうい
うきっかけでお作りに
なつたんですか？

たがわ ああ、動いて面
白いから、一回作つてみ
ようかなつて思つて。そ
ればかりで展覧会をした
ことがあるんですけれ
ど。でも作つたら、あま
り面白くなかつたんで
す。

小川 では、今はあまり
作つていない？

たがわ それを分解し
て、違うようにしてま
すけれど。手足を取つて
体の一部分だけにして
しまつたり・・・。

小川 ハンス・ベルメ
ールが、たとえば頭を取
つて足と足を直接つな
げてしまつたように？

ベルメールは好きですか？
たがわ 面白いですよ
ね。写真の方が面白い
です。三年前か、洋書売
場で写真集を買いました。

小川 それまではご存知
なかつた？

たがわ はい。
小川 私の考えでは、

今、球体関節で人形を作
る人は、四谷シモンさん
とか吉田良一さんなど、
ハンスベルメールに影響
を受けた方がいて、そこ
から始まつたような気が
するのですが。

たがわ 僕はおこられま
したけれども（笑）

小川 おこられた？誰
に？何故？（笑）

たがわ 個展の時に球体
関節の人形で案内状を
作つたんです。皆さん、
この人形があるんやろ
なつていらつしやつた
んですけれど、それが始
まる前に売れてしまつた
んです。他には球体関節
の人形はなくて、実際には
魚とか訳の分からないも
のばかり並べていたん
です。

小川 ああ、それはおこ
るわ（笑）。球体に関し
ては熱心なファンの方が
多いですからね。

たがわ 球体つて、デッ
サンに使う人形があるで
しょ。あれが動けますか
ら面白いな、と思つた
んです。あれをネジにし



たがわまさき

四国に生まれ、大阪に育つ。

デザインの仕事を始めるうちに、人形の制作を始めた。桐壺や桐に布を張り、造形的にも大胆で美しいその作品は、関西で注目を集め数多くの展覧会に出品された。人形教室も主宰したがその後閉鎖、現在は大阪西成区飛田に地酒や家庭料理を扱うギャラリースペース「游花舎」(ゆうけや)を夫人と経営。手作りの食器や地酒、添加物のない食材にこだわり、店内や印刷物はたがわ氏のデザインでまとめられている。西成区飛田は飾り気のない下町としても知られ、たがわ氏の愛読する黒岩重吾が小説の舞台として取り上げた地域である。たがわ氏は人間的に面白い場所であると話す。人形の他、絵画、イラスト、彫金、七宝焼など多くの制作も手がけている。

たら取り外しできるな、と全部ネジ式にしたんです。彫金をやっていますからそういうネジもできますし。でも球体を作っても飾りを沢山つけてあまり動けなくしてしまってますから(笑)

■表現すること

小川 でも、たがわさんの作品はすごくきれいですね。作品の写真は自分でおとりになるんですね。写真でも遊ばれるんですね。

たがわ 白黒のものは現像引き伸ばし機をもらったので、現像して遊びながら面白いものができたりするんです。写真のことはよく分からないんです。だから光も蛍光灯と裸電球しかなくて青く写ったり赤く写ったり。小川 でも、それが独得な美しさになっていきますね。プロの写真家がみたら怒られるんでしょうけれども(笑)。

たがわ そうそう(笑)。

小川 十一月の昔人形館青山でやる個展の内容は、どのような感じですか?

たがわ 兎や猫、河童などです。古い作品もできます。

小川 何故兎を?

たがわ 僕が兎年ですから。それから一二月の大学堂の展覧会には久しぶりに関節の女の人を作ろうかな、と思っっています。一メートルくらいあるキュートで、宇野亜喜良みたいな。

小川 あ、やっぱり宇野亜喜良は好きですか?

私、そうじゃないかと思っっていたんです。

たがわ ええ、好きでした、若い頃は。

小川 何かこれからやりになるうと考えていることは?

たがわ 陶器をやるうと思っっているんです。4月に展覧会をやるうと思っています。

飾らないで、うちのコースの料理を食べてもらって人にその器を使っ

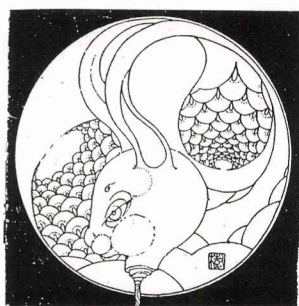
見てもらうというふうにするので、気がつかないで帰る方もいるかもしれない(笑)。今、人形よりもそっちの方が...。何でも、こういうものを作ろうと思っ制作するまでが楽しいのであって、それ以降はもう次のことを考えています。できあがったものは、もう、全然興味がわかないんです。

小川 では、完成品には執着がないのですか?

たがわ ああ、ありませんね。あまり飾りませんし。

小川 もつたない感じもしますけれど、でも、何か作るということがお好きなんですね。

たがわ やっぱ何か作っていないと、せつかく生きていますし、死ぬまでは(笑)。



能津美津子 人形達展、ハンス大賞などで受賞した人形作家。ぬいぐるみで奇想天外なコラージュ的な作品を制作。現在は制作をしていない。
大学堂ギャラリー 大阪心齋橋にある眼鏡店のギャラリー。同店の企画で年に1回行われる人形作家のグループ展は、関西地区の鋭い創作人形作家が顔を並べている。

游花舎(ゆうけや)
大阪市西成区山王2-13
18(飛田本通商店街)
☎ 06・6311・8300
六(午後五時〜一時・日曜休)

■インタビューを終えて

小川千恵子

人と話をするのはあまり好まない、といいながら、人形だけでなく、イラスト、彫金、陶芸、絵画など次々に多才な表現活動を展開するたがわ氏は、本質的には非常に饒舌な人なのではないかと思う。食事、酒にまで至る自分に関わるもの全てに、アーティスティックに関わる彼の世界を堪能するには游花舎のような空間が不可欠であり、それはたがわ氏自身が一番よく知っていたのではないだろうか。完成した作品には執着せず、淡々と生き、制作を楽しむ。特に主張もないような物言いをされるが、店の作りにしても作品にしてもかなりのこだわりを感じる。デザイナーである氏の仕事の成果といってしまうはそれまでだが、作者の寡黙はミステリアスな作品の魅力にしばし心を沈めるための必要条件である。



ゲイルからの手紙

ゲイル・エニド・ジマー

第3回 ドール・アートのパトロン

英語でパトロンの言葉の定義をするのは簡単だが、今日の意味においてはよく誤解されるようだ。芸術や他の多くの場合について考えると、豊かで権力のあるイタリア・ルネッサンス期やヨーロッパのどこかの貴族が、当時の絵画や彫刻の巨匠を衣食住において世話をしたことがすぐに連想される。

これらの貴族のパトロンより以前には、教会があった。現代では、芸術家は主に地域や国の政府、組織などから助成を受けている。彼らはその博愛精神より税的に優遇され、市民とその組織の良い関係を生み出すのに貢献する。

人形作家にパトロンはいふのだろうか？ イエス。女優のデミ・ムーアや作家のアンヌ・ライスのように裕福なコレクターであるパトロンは、才能のある作家がプロとして一日中制作に集中できるように、高価な作品を買い続け価格を高く保っている。

だが、少なくともアメリカでは、財政的な支援をすることだけがコレクターが人形作家をサポートする気持ちを表す手段ではない。

彼らは作家と一緒にあって一般大衆にドールアートについて教え、色々な方法で作家を援助してきた。

私はドールアートのパトロンが全て何らかの組織に属しているというような印象を与えないのではないのだが、ここに二つのプロの人形作家のグループがある。このグループは長い間、人形作家とコレクターの相互依存を認め、共に

会員を増やしてきた。事の発端は一九六三年の全米アメリカ人形作家協会 (NADANA) がコレクターを受け入れ、それをパトロンと呼んだことである。アメリカ創作人形作家評議会 (ODAGA

オダカ) も、同様なカテゴリーの会員を受け入れた。多くのコレクターがそれぞれの会員となっている。

今年、エルシー・オアによって作成されたニアダのパトロンハンドブックに、その役割について説明があるので、ここではニアダとパトロンについてふれてみよう。

ハンドブックはバーバラ・ステイカーによる「パトロンの定義」という一

ページを含んでいる。辞書による基本的な定義のあと彼女は、ニアダのパトロン会員は、人形を展示したり、紹介するためのプログラムを組んだり、人形誌に記事を書いたり、作家を励ましたり作品に反応することなどで、自分にあつた解釈をするものだとしている。

最初の頃は、作家会員は



スーザン・スコーギンは「人形を買ってくれるとき、パトロンはお金以上のものを与えてくれる」という。フロイド・ベルは「パトロンは会員作家の数を増やすため才能のある作家について注意しているべきだ」と提案する。ニアダのパトロンが国内外に広がり、ここ数年何人かの会員作家が引

退したり亡くなったたり、多くの積極的な作家が萎縮しつつあるからには特に、パトロンとは多くの人が活動している様々な形態でのサービスとなるのだ。

パトロンが何であるのか定義を求め続けていた。このハンドブックはそれらのうち十七通の手紙を紹介している。物語作家のレノア・デイビスは、ニアダの細則が作家の役目について詳細に記述してあるのにパトロンについてはそれがないと指摘した。作家の多くはステイカー女史があげたような援助と同じ方法をリストにあげ、それに友情についても足している。

パトロンは人形を買うことで直接作家を支援している。だがこれは基本的な役割ではない。実際ドールアートのステイタスが上がり、ニアダと人形雑誌や出版社の努力の成果のため、結果的に人形の価格が劇的に上がり、初期のパトロンは活動的な会員作家の作品を買うことができないのだ。また、作家は美術館や美術画廊で作品を発表できることから自由を増したが、そ

のテーマの多くは従来のコレクターにアピールしていない。

ニアダでは全てのパトロンが総会に出席しているわけではない。ある人は時々、ある人は全然で、わずかな同じ顔ぶれのパトロンが来る年も来る年もプログラムを構成し、展示会場を準備し、くじを売り、参加者を登録したりしているのである。あるパトロンは年四回のニュースレターを発行するが、多くの人は、やはり多くの作家会員のように沈黙している。

人形収集の歴史上、作家にとつて遊び道具でない人形を制作することは勇気が必要だった。だがそれはその作品を愛する新しいコレクターを生み出した。彼らは作家にとつて単なるコレクターではなく、伝道師や、教育者、促進者であり、友人でもある。彼らはこの言葉が意味する全てにおいて、ドールアートのパトロンなのである。

写真上 ニアダのパトロン会員のレオナ・ピーターソン

写真中 今年のニアダに出品されたリサ・リヒテンフェルの新作、彼女は今、ニュースレターでパトロンに人形の芸術性の定義について問いかけている

お化け屋敷店長日記

第3回 怒りの鉄拳

文・イラスト 摩宮ピノン



私にもいいよ怒りの鉄拳が降り始めました。私はいわゆるご立派な人間とはほど遠いので、すばらしい世間の方々のお怒りは人一倍受けてきました。昔、石除け地蔵と呼ばれていたこともあるくらいです。

人形を作り始めてから何カ月もしないうち感じたのは、絵を描いていくよりももっと「お怒り」は多いらしい、ということでした。まず、人形自体が嫌いだという人が沢山いることを知りました。また、私の作る人形は個性的すぎたり、怖い顔だったり、エッチだったりするので余計です。私は主人と喫茶店をやっている、店で人形を作っている、人目に触れてしまう機会が多いのです。

イラストの人形は私が一番気に入っている人形で、イメージモデルはロックミュージシャンです。私がびっくりするくらいBigenaロック界の石除け地蔵で、私はファンなんです。（もちろん、音楽が好きなんです）

この子を作っていたある日、久しぶりでいらした常連の五十代のお客様が私とこの人形を見るなり、突然大声で怒りだしたのです。「この人形は怖すぎるよ!」「作って良いものと悪いものがある」その後も何か言っていたみたいですが、とりあえず「石」になることにしました。最後に一言だけ「どうもすみません」とは言いましたが、手は動かし続けました。その後もOLの若い子に「黒魔術ですか?」と聞かれたり、入店してきたとたん、この人形に釘付けになり「コワイ!」を連発されたり。惚れ込んでくれたり、買いたいと申し出て下さった方が一番多かったのもこの人形だけど、嫌われたり叱られたりもこの子がダントツでした。

イラストではここまではつきりと好き嫌いがあらわれる事でありません。好きな絵を誉めることはあっても嫌いで怒ったりされることは滅多にないと思います。人の感情を動かす

パワーが絵とはケタ違いなんでしょう。人形作りしての限り、強力な怒りの鉄拳はこれからはばんばん当たると思ってます。

7月に出来上がったこの人形を今も店の一番目立つ席のテーブルの上に横座りにさせていますが、今はこの子を悪く言う人はほとんどいません。最初怖がつてた人達も「だんだん優しい顔になっていく」って言ってくれてる人が多いです。（自分が見慣れているだけなんですよね）

つい最近、天使みたいな可愛い人畜無害な女の子の人形を作ってみました。この子は確かに怒られたりしません。でもあまり誉められもしません。私の愛着も今一つです。二体飾ってあれば「なんてステキ!」と言われるのは例外無く怖い顔した男の人形の方です。人形を作る皆さん、アーティストティックな感性の下に石の心を合わせ持ちましょう! そうしないと、今に新しいものは何一つ出てこなくなってしまうでしょう! そっちの方が、ずーっとコワイのです!

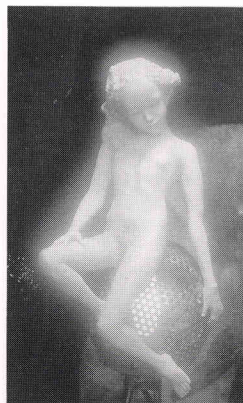
行けなくて残念!

会員の方から展覧会のお知らせをいただきながら伺えませんでした。レビューでご紹介できないので、こちらで写真を紹介させていただきます。

伽井丹彌さん（北海道）

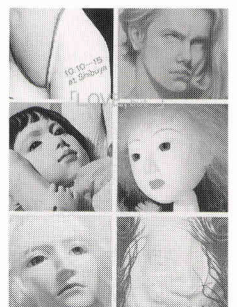


塚野裕子さん（広島）



戸田和子さん（茨城）

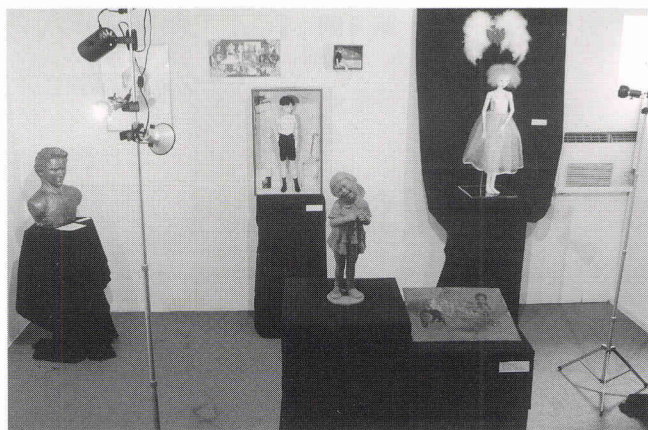
八木裕子さん（富山）



アトリエパフォス（東京）

人形つれづれ

連載第七回



文 福島弘太郎

人形グループ展の搬入を先程終え、いつもの事ながら人形の展示の難しさをあらためて感じています。年に数回はこのような展示があるのですが、その度毎に会場で頭を抱えてしまいます。特に今回は初めて使うギャラリーだったうえ、それぞれがどのような作品を持ち込むのか打ち合わせが不十分だったので、相当地に手間取りました。

どのような物であれ、立体は多少なりとも空間に対して影響を及ぼします。人形に於いてはさらに作者が意図せずとも何らかの意味内容を伴って空間を支配するので、グループ展などのように違った個性が集まる場所では、時として展示がうるさく感じられる事があります。

作品としてまとめる様式化がより高くなるにつれて完成度も高く大人しくなるのが一般的ですが、従来の規範に当てはまらない実験的な物の持

つ面白さを期待してこそ、のグループ展ですから、周囲に波及し干渉しあうような余計な振動を適度にカットし個性を尊重しあうようにする事が、このような展示の難しさでしょう。隔離するということではケースに入れてしまふのは手取り早い方法ですが、空間の切り方が強制的で広がり欠けるのであまり用いられません。スペースが狭く限られている状況で周りの影響から逃れるといった逆の使い方をしたほうが効果的でしょう。多くの場合はカーテンやボードで区切ったり、独立した展示台や個別のスポットライトで各々の作品が占める空間を仕切ったりする、よりソフトな方法を選びます。

しかしそれでも別個の作品が一つの空間に混在するわけですから、全体の統一感はある程度損なわれてしまふのはやむを得ない事です。もしそれ以上のまとまりを求める

のなら、共通のテーマや素材大きさなどの仕様を細かく統一するしかありません。これは自由な発想と挑戦的な試行を期待する人にはあまり押し付けたくない規格なので、結局いつも頭を悩ます事になってしまいます。

その点いつも良くてできていると思うのは、雛壇の飾り方です。あの緋毛氈はいかなれば開かれたケースのようなもので、全体として一つのまとまりを保ち周囲と一線を画しつつも、置かれた空間に柔らかに浸透し、全体をその雰囲気包み込んでしまいます。

以前は雛祭りの頃になると家中の人形を種類の別無く雛壇の下段に飾ったそうですが、そのような懐の深さも生活に根付いた伝統の力でしょうか。今日の反省も踏まえつつ、ぜひ次の展示の際には参考にしたいと思っています。

(人形作家)



「女」

大島和代の世界

－パリ、プーランとル・フュールのオークションでの現代人形と大島和代の作品－

文 ソランジュ・ストラウツィンスキ



エルベ・プーランは古い人形のオークションと展覧会を、一九七〇年代に初めて開催した人物である。このオークションはパリで著名なホテル・ドウルオで行われた。私達が「古い人形」というときコレクターや愛好家にとって、一九世紀末期から二〇世紀初頭にかけてのドイツやフランス製の人形を指す。それらはほとんどが革や関節のボディのビスクドールである。このオークションではそれらの人形の最高傑作を見ることができたし、世界中の偉大なコレクターと出会うこともできた。当時このオークションで人形と玩具のエクスペール（専門家）となったのは、著名なディーラーであったアラン・ルナールである。彼の没後、主催者のプーランはこのハイレベ

ルなオークションをしばらく中止した。

一九九〇年に、プーランはジェラルド・エティエンブレッドというUFEに所属していた古い人形の専門家に会った。（UFEとは非常に有名なフランス専門家協会のことである。）そして現代作家の人形もオークションで紹介しようというアイデアも生まれた。その時私は創作人形に強く興味を持つ人物として、よく知られていた。

そして私は現代作家の人形のエクスペールになるように頼まれ、UFEから同じ依頼を受けた。私は最高の作品を選び、フランスで最高の創作人形となりうる人形を紹介することに伴うリスクを請け負わなければならなかった。作品は、まずフランスで制作された

人形であること、その他の地域からの人形は二義的に考えている。だがフランスでは現代作家の人形はほとんどないし、愛好家の数も決して多くない。作家は組織されていないし、公のオークションで現代作家の人形を見たこともなかった。私には、リスクもあったが情熱もあった。そしてアンヌ・ミトラニやアンスラン、エロイーズといった何人かの有名な作家の間で、私がその作品に特別に興味を持った作家がいたのである。

彼女は、ごく少数の作家やパリの装飾美術館のバーバラ・スパダッチーニにしか知られていない無名の作家であった。そして私が「最高」と感じたその作家は、マダム・大島和代だったのである。

大島和代は日本に生まれ、家族と共にパリに一四年間暮らしていて、普通の綿を絹で覆った非常に個性的な人形を作っていた。私は彼女に、将来、オークションで作品を発表する気はないか尋ねた。彼女は当時も（今も）、非常に完成度の高い作品を年に四、五、六体くらいしか制作をしていなかった。たとえば彼女の人形

が伝統的な技法や高価なビスクドールからかけ離れているとしても、そしてフランス人の創作でなかったとしても、私は発表しなければならなかった。敏感な人なら誰でも、彼女の作品を正當に評価するだろうという確信があった。また別の面で、彼女の作品の数が非常に限られていることから、オークションに向いていると考えることが出来たのである。

彼女と友達になり、一九九〇年の十二月三日にフランスで最初のショーとオークションを行った。小規模だが選り抜かれた現代アーティストの部門として、ミトラニ、アンスラン、エロイーズ、そして大島和代の紹介をした。手にバラの花を持つ過去のヨーロッパの少女を描いた大島和代の作品を最初に買ったのは、フランス人のコレクターだった。

これが成功の始まりだった。私はこのようなオークションを

年に二回、春期は主に六月、冬期は十一月か十二月にホテル・ドウルオで開催している。これはカタログのある信望の高いオークションとして、古い人形とともに、有名作家や新進作家の現代創作人形を展示し続けている。

なぜ大島和代の人形は傑作であるか

大島和代の人形が傑作であるのは、作者自身が傑出しているからだと言えることができるが、彼女の作品は少なくとも次の三点において秀逸である、すなわち、技術、美学、芸術性においてである。

技術的な観点から、誰もが最初にその人形の顔、ボディ、足、手をみてすぐに、すみずみにわたる造形の正確さ、完璧さを口にするだろう。ショーのビクターも、彼女の作品を見て、どうしてもそれだけの仕事があったの綿と絹でできてしまうのか不思議だと、口々に語る。

ヨーロッパでは、特にフランスでは、美しい人形は主にビスクドール、現在ではレジンでできていると考えられている。私達は紙や布製の人形の習慣を持たない。だが彼女の人形が実に良くできているというのは真実だ。他の作品もそうだが、何の支えもなくたつことと出来る「最初の一步」



フランス人形（ブリュー）と純和



（彼女の娘の純和の赤ちゃんのときの肖像人形である「DFJ六号の近況報告に掲載」や、手を後ろに組み横を向く「八才の純和の肖像」（写真）のような平衡は、類まれである。「八才の純和の肖像」は一九九三年七月八日のショーで参観者より賞賛を浴び、その月の「ドゥルオ・ガゼット」の表紙として撮影された。だが、これらの人形の技術的な完璧さの考察に同意はするが、私にとってそれは一番重要なことではないのである。

美学、芸術的観点から、私が本当に興味を持つ点である。つまり、彼女の作品は子供時代や女性らしさにおける、とても優雅で確かな何かを表象しているという

ことなのである。彼女の作品の多くは、娘の純和の肖像である。今は遠くになってしまった娘の幼児期の異なる年齢の思い出から作品は生まれる。「最初の一步」を見れば、子供の柔らかな肌を感じることが出来る。彼女の人は写真に準ずるほどのリアルさを目標としている。「女」の座像では、女性の奔放さを感じることが出来る。この作品は一九九五年十二月にパリのホテル・ドゥルオでの次のブルーラン・アンド・ル・フュールのオークションで紹介される。大島和代の肖像人形は非常にリアルだが、同時に詩情がある。水彩画家であったことから色の調和、デザインの正確さが彼女の作品を展開させる。表現の正確さと詩情は芸術としての中心的性質である。記録のための肖像や単純に技術的な挑戦をするということからかけ離れて、彼女の作品は古典芸術の平衡性に達している。だからこそ彼女の作品を見ても飽きることはない。これは、彼女の作品が何故傑出していかという理由を、まさしく言い直しているものである。人形は優雅だが、仕事は力

強い。おそらく私達は彼女の作品の平衡性を、禪の陰陽の対比と比較することが出来るだろう：内容が陰で、表象としての作品が陽であるように。

大島和代の人形の洗練されたシンプルさ、その「東西融合」のスタイル

私がオークションで人形を見せるようになったとき、優れたコレクターは人形の質を見極めるのに長い時間をかけないだろうということを確認していた。実際、子供時代のテーマばかりがコレクターや愛好家に喜ばれるときには、作品を現代的にするためにテーマやスタイルにおいて独創的、特徴的な面を見せることが重要である。彼女の場合、それは日本とフランスの文化を融合したテーマを意味する。すなわち日本の技術的な背景と東洋の精神的な面をもちながら、そこに合理性で審美的なフランスのスタイルを導入するのである。たとえばそれを、ここで掲げる「ブリューを抱く日本の少女の肖像」（一九九五年七月十四日オークションに出品）ではつきりと見るこ

とができる。（あるスイス人がこのブリューを本物だと信じて入札を希望した！）ここで明らかにしたいのは、大島和代は本物のブリューの人形を手にしたことがないことだ。彼女が持っていたのは写真と、フランスの古い人形ではいかにマークが重要かという印象だけであつた。このショーでは、誰もがこの小さな少女の優雅さと本物と間違えうほどの人形を賞賛した。私が話したほとんどのビジターが「最初の一步」のリアリズムと、この少女の優雅さのどちらかを選ばなくてはならないことに非常に戸惑いを感じていた。

とても有名で重要なコレクターがアメリカの女優、デミ・ムーアである。彼女は現代創作人形の最高品を欲しており、マダム大島の主要なコレクターである。パリの装飾美術館、スイスのスタイン・アム・ライン美術館もこの作家に早くから関心を寄せ、多くの愛好家がいくつかの作品を一度に欲しがっている。彼女の人形を評価する人は人形愛好家だけではないことも明らかにしておこう。

私の側から言えば、彼女

の人形を発表するのは嬉しいことだ。私はここに掲げる「小さな犬と座る少女の肖像」（一九九四年三月二十六日出品）が特に好きだ。マダム大島はこの作品を一九九一年十二月六日のオークションのために制作した。

最後に私がこの文章を書いた目的を繰り返すならば、彼女の人は単に、可愛く良くできているというだけでなく、本物で、深く、美しい芸術的な仕事であり、現代の国際的な文化を包括しているのだといいたいことなのである。彼女の作品は究極のシンプルをめざし、そこに確かに到達したのである。



純和とムース（犬）

オークション問合せ先

ETUDE HERVE POULAIN ET REMY LE FUR
20, rue de Provence, 75009 Paris, France

次のオークションは：展示 12月20日、
オークション 12月21日

大島和代の作品のサイズについて・多くの作品は高さ35cmから50cmであるが、12cmから90cmの作品もこなす。（この作品タイトルは筆者原文の訳語であり、大島氏自身によるタイトルは写真横に掲載した。）

「女」	「ブリューを持つ肖像」（人形12cm）	「八才の純和の肖像」	「犬と座る少女の肖像」	「着物で座り込む純和の肖像」
48cm	40cm	42cm	35cm	25cm



ロザリー・ワイエル人形美術館 (シアトル)

東京都国際平和文化交流基金助成事業

日米ドールアート 文化交流事業

1995年7月20日～8月1日

文 ドール・フォーラム・ジャパン事務局長 小川千恵子



NIADA 前会長ヘレン・キッシュの作品

日本と欧米間のドールアートの交流が皆無に等しかった現状から、何とか一歩を踏み出そうと、ドール・フォーラム・ジャパンが主催し東京国際交流財団の助成を受けた「日米ドールアート文化交流事業」には、ドール・フォーラム・ジャパン事務局長の小川千恵子の他、和紙人形作家の中西京子、創作ビスクドール作家の三輪輝子、オブジェ風のクレイドル作家のさとうその子ら4名が参加、約二週間にわたりシアトル、ニューヨーク、フィラデルフィアを尋ねた。(文中敬称略)

シアトル

ロザリーワイエル人形美術館

シアトルの郊外にあるロザリーワイエル人形美術館は設立されて間もないが、その豊富なコレクションと美しい展示は知名度が高い。コレクションは全て館長の所有である。

貴重なフランスのアンティークドールを中心に、

ドールハウスや量産のコマールシャルドール、現代人形のコレクションが充実しており、現代人形に関しては今世紀の傑作とされるリサ・リヒテンフェル、シュロット他多くの作家の代表作がさりげなく展示してある。一行はワイエル館長と歓談、日本の現代の状況を説明したりして、今後のドールアートの発展のためにこれからも連絡を取り合い、情報交換をしていくことを約束した。



ワイエル館長を囲んで 左から中西京子、館長、小川千恵子、三輪輝子、さとうその子

ニューヨーク

人形作家のアトリエ訪問

グリニッジビレッジにあるウタ・ブラウザーのアトリエを尋ね、一行は人形の作りや工程、最新作を気の



ウタ・ブラウザーに説明を受ける三作家

済むまで見学し、質問をした。ブラウザーはどのような質問にも丁寧に答えてくれた。また参加者の作品の写真を見て「このような日本の作家がアメリカの人形界を明るく照らして新しい可能性をもたらして欲しい」と語った。ここから一行に中西京子の弟子であったニューヨーク在住の和紙人形作家ダン・フレッチャーが同行した。元プロードウェイのダンサーというユニークな経歴の持ち主で、独特の肉体観察の視点を持ち日本の芝居の登場人物の人形を制作する。大変な日本通で、材料の和紙を縮緬加工する技術を習得している。ニューヨークでは、他にメトロポリタン美術館や工芸美術館を見学す

るほか、ドールアートを扱うギャラリーを尋ねた。また画材店で、日本に馴染みはないが、アメリカでよく使われる人形製作用の素材や材料についてフレッチャー氏より説明を受け、研究や参考のために購入をした。

フィラデルフィア

ニアダ・コンベンション シェラトン・ソサエティ

ヒルを会場に七月二六日より三〇日まで開催。プログラムで朝早くは八時から、夜は一時頃までぎっしりのスケジュールである。ニアダとは、アメリカの人形作家が芸術的な人形の社会的な認識の向上を目指して約三〇年前に設立された組織だが、その会員作家になる審査は厳しく、現在でも会員作家は五十余名しかない。かつては世界最大の人形愛好家の組織UFD Cに属していたが、その先鋭的な意識により一般志向の強いUFD Cより離脱、少数ながら西欧においては最高レベルの作家の組織となっている。このカンファランスにはアメリカを代表する作家が年に一度集まる



プログラムを行う小川(左)とリスフェルド純子



日本作家の展示をつぶさに観察する参加者



メリカ在住の人形作家リスフェルド純子さんの協力を得て現代作家の作品を紹介した。日本の現代作家の活動は、アメリカでも深く関心を持たれていたのにきちんと紹介されたことがなかっただけに反響も大きく、カンファランスの参加者のほとんどがこのプログラムに出席した。

このプログラムのために、小川は三七人の日本人作家に依頼し、総数一五〇枚ほどのスライドを集め、その中から合計八〇枚あまりを紹介した。同時に特別にテーブルを用意してもらい、日本からの三作家の作品と資料を展示した。プログラム終了後も展示品の撮影や個人的な質問で参加者の多くが会場をなかなか離れなかった。その後、会場のホテルで会う参加者ごとにプログラムに対する賛辞を頂

いた。 参加作家の感想 三輪輝子

以前から聞いてはいたのですが、日本とアメリカ、ヨーロッパの人形に対するレベルの差というか、意識、技術、文化の差を感じました。日本でも昔、家が広がった頃は市松人形がありましたが、いつの間に、飾る余裕もなく電化製品で溢れて今は精神的にはとても貧しいと思います。アメリカの作家の作品については、正にドールアート、芸術の世界で、人形という形を取っているのだと思いました。

さとうその子

アメリカの作家の人形については、どこの国も一緒だなと思いました。アメリカだからすごいんだと思いついていたのかもしれない。日本の作家、もの作りの人たちの技術も上がったのでしよう。ただ表現の

方法がとてもユニークで楽しかったです。体の動きや顔の表情がでていて、作家の個性があつたように思います。

中西京子

日本の国内でも人形作家たちは自分の制作する人形の分野については関心を寄せますが、素材が異なると自分たちとは違ったものと受けとめがちで、ともすれば視野が狭くなりがちです。人形の世界をもっと広く大きく、見直す機会を今回ニアダに参加することで、自分の心に深く持ち帰ることが出来た事を幸運に思います。ドール・フォーラム・ジャパンの小川千恵子さんが日米ドールアートの文化交流を積極的に押し進め、日本の作家の現状と紹介をアメリカで行われたことのエネルギーには頭が下がる思いです。アメリカのドールアーティスト達がおそらくは初めて接するであろう日本の人形の世界。この交流がスライドではなく実物の多くの人形たちで出来る日が来ることを期待しています。

*事業に参加するまで親交の全くなかった3人の作家だが、この旅行を機会に非

常に親密になった。帰国後行った反省会では、このような集まりを継続して持ち、交流会として輪を広げ発展させ、いずれは日本でニアダのような大会に発展させたいという意見で全員一致した。

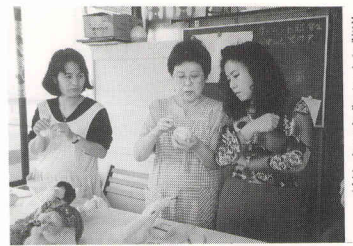
余談だが小川千恵子は、ニアダ前年度会長のヘレン・キッシュの推薦を受け、パトロン会員選定の選挙に立ち、有効投票を得て日本人で初めてのパトロン会員となった。ニアダのパトロン制度については一四頁「ゲイルからの手紙」を参照していただきたい。

●人形誌のコメントから「ドールズ」一月号号(三作家とリスフェルド純子さんの作品の写真入りで)「今回のニアダの大会が目立ったのは、現代日本作家に焦点を当てた特別なプログラムである。ドール・フォーラム・ジャパンの小川千恵子と人形作家のリスフェルド純子が日本のドールアートをスライドで紹介した。同行した三人の作家、中西京子、三輪輝子、さとうその子が作品を展示した」この他「ドールリーダー」誌は、中西京子さんの特別記事を掲載した号で編集長のコメントでニアダの日本のプログラムについてふれた。同誌では来年二月号に今回のプログラムを元に日本作家の紹介記事の特集する。記事は小川千恵子が執筆した。



写真左から リサ・リヒテンフェル、ビル・ネルソン、EJテイラー

DFJ 活動報告

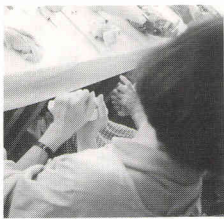


指導する黒川さん(右)

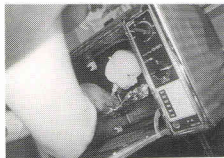
DFJ ワークショップ サーニット集中講習会

10/15,22,29 於ミワドール

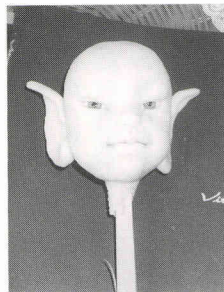
去る十月の三日の日曜日を使って、ミワドールにおいてドイツからの新素材サーニットの集中講習会を行った。講師にはアメリカと香港で活躍するドールアーティスト、黒川早恵美さんを迎えた。最初は紙粘土で制作をしていた黒川さんは、アメリカでサーニットに出会い、その質感にひかれ技術を独自に習得した。特に、肌のリアルさやしわ、血管などの描写に優れているといい、自作のサンタクロースを披露した。洋人形のリアルさを求める人には是非勧めたい素材だと語る。参加者の関心は高く、遠方では金沢や広島から泊まりがけの参加者もいた。またレベルも高く、プロの作家も珍しくなかったもので、すぐに技術をものに、作品を作り出そうという人も多かった。よく使われる紙粘土や石塑等の空気乾燥の粘土と異なるサーニットの特長は、なれば手早く完成品を作ることができる。



手のひらで暖め柔らかくする。



焼成は家庭用のオーブンでできる。支えとして何かと役に立つのが芯に使った家庭用アルミホイル



約15分で焼き上がり。すべすべした表面を作るのは老人よりやや難しい。顔のしわや歯を挿入するのは意外に簡単。

ることだ。オーブンで焼くまでは柔らかさを保ち、焼成は家庭用のオーブンで百度程の温度で十〜二十分程度よい。注意しなければいけないのは、汚れや埃がつきやすいので、常に作業台と手は清潔にし、けばだつた服を着ないことだ。また整形は指先でしようとして、基本としては何種類かの道具をあわせて使うか、指の腹などで行う。焼く温度や時間を過度にすると、有毒ガスがでるので、焼成時はオーブンから離れずに、時間と温度に注意する。注意すべき点を守れば、サーニットはリアルな肌の質感を出せるユニークな素材で、欧米でもシュロットなどこれを好んで使う作家が多い。

参加者の希望から、一月に難度の高い手・足のワークショップを開催する。自分の持っている技術と知識を惜しみなく親身に教えてくれる講師の黒川さんも参加者から親しまれている。初めての受講の人は事前にサーニットになれるための顔のワークショップの受講が望まれる。問い合わせ・申し込みはミワ・ドールまで。(三頁参照・問い合わせはDFJ事務局でもうけています。)

LETTERS

22

■はじめまして、スペイン・バルセロナ在住の寺下です。ここ何年も生活のための仕事(職業訓練校講師と映画、コマージュのスペシヤル・エフェクトス)が忙しく人形制作がストップしてしまいます。でも毎回送られてくるDFJを読んだらと制作意欲が沸いてきて、何とか時間を作ってまた制作を始めようという気になつてきました。さて、スペインの事でボクが知っていることを少し書いてみたいと思います。まず、日本という創作人形のような形は存在しないと思います。ボクが住んでいるバルセロナでは、お祭りに使うカッブグロスと呼ばれる張りぼての巨大なマスクやジュガンツという五メートル近くある大きな張りぼて人形が伝統工芸としてあり、それらを作る職人やグループが各自活動してたり、バレンシアの火祭(フアイジャ)の職人達(数十メートルもある張りぼて人形を一年かけて作る)のが伝統工芸という形で残っています。もう九年も日本に帰っておらず、日本の創作人形界の情報もまったく途絶えていた時にDFJにめぐりあえた

ことはボクにとって一つの活動力になりました。何かボクでお役にたつことがあれば協力させていただきたいと思っています。それではまた、

寺下昇平(スペイン)

□スペインの張りぼての人形について、真つ白な肌の少女の球体関節人形の写真を送ってきてくれました。アーティスト・ドールとは、地域との関連でなく、アーティスト個人によつて存在するものだと思います。スペインとは色、形と刺激されるものが豊富な環境ではないでしょうか。新作のお知らせを期待しています。

(○)

■・・・二年ほど前、学生劇団の現役だった頃、作・演出を担当する機会があつて、その時に作った芝居のタイトルが「人形人間」。青年カゲロウの恋した少女ミツルが実は、女王が娘エリコ蘇生のために医者に造らせた人工肉体であつた……という物語で、「人体の怪奇と美」をテーマに、アングラ的演出をしたものでした。人形役も美少女人形ミツルの他に、兵隊人形、踊り子

人形、道化師人形も登場させ、イメージとしては不気味でエロチックでグロテスクでしかも美しく迫力と魅力と品のある作品作りを目指したものでした。思い入れのある作品なのでまた何らかの形で表現したいなと思っております。(後略)

福田省吾(京都市)

□長いお手紙をどうもありがとうございます。福田さんは卒論の一部で人形をとりあげるそうです。人形もいずれ制作する希望をお持ちとか。個性溢れる若きクリエイターの出現をDFJは大歓迎します。

(○)

★訂正と補足

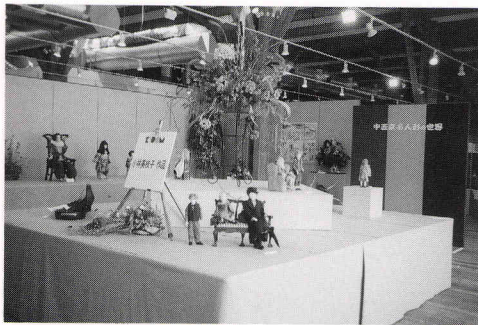
・DFJ六号「教室案内」で藤井路以教室の郵便番号が違つておりました。正しくは一七三です。

・DFJ六号カバリーインタビュー「五頁「注」で、「日展」は昭和三年に社団法人(民間団体)として再出発したこと、「伝統工芸」の伝統工芸展はイデオロギーの違いにより日展から分裂したこと、「朝日現代人形展」が開催されたのは数年前ではなく、十数年前であつたことを、補足し訂正いたします。

木曾駒ドールミュージアム 夏期オープン

8月1日～31日

中西京子の和紙人形を中心に現代ドールアートの展示をする木曾駒ドールミュージアムが、会場となる木曾駒新和スキー場のレストハウスを改装し、夏期の間オープンした。ログハウス風の広々とした会場の前半分を創作人形作家の中から革人形の黒沢正子、ビスクドールの三輪輝子、オブジェドールの高橋操、布貼り人形の小林美枝子、今号で近況報告に登場した藤井路以の5人が一人平均10体ほどを展示をした。中西京子は、奥半分の空間でジオラマの江戸時代の芝居小屋や、出雲の阿国、一体ものでは狐忠信などの代表作など弟子の作品を含み30あまりの作品を展示した。ドールアートといえば、だいたいにおいて都市部で展示されるが、このように第一線の作家が緑豊かなリゾート地の会場でゆったりと鑑賞されるのは、作家にとっても作品にとっても貴重な機会であろう。残念なのは、今回のミュージアムは試



行段階であり期間を限定しての開館であったことである。次回開館も考慮中とのことだが、ドールアートが大胆に冒険し、発展いく場としての専門の常設美術館の出現が待たれる。(O)

せ・らへる 移転オープン

東京・新宿のPEPEで長く営業をしてきたせ・らへるが、9月11日に原宿の千駄ヶ谷小学校前のビルに新規オープンした。JR原宿駅から徒歩10分かかる程度で、駅界隈の喧噪から離れた静かな通りにある。開店記念の展示は友永詔三の版画展で、オープニングパーティには友永氏や関係者の他、人形作家では滝康子の他、四谷シモンも顔を見せた。四谷シモンの人形学校エコール・ド・シモンは、新しいせ・らへるから歩いて5分位である。今後も人形に積極的に取り組んでいく構えのせ・らへるの新しい展開に期待したい。(O)



オープニングパーティで友永詔三氏(左)と店長の金田慶南さん

●DFJ よりのお知らせ

DFJのバックナンバー1～3号は在庫がなくなり、これからは再版いたしません。4号もまもなく在庫がなくなります。お早めにお申し込み下さい。

●投稿募集

LETTERS、REVIEW・・・採用分にはリーセはがきセットを進呈。

INFORMATION ニュースがあったらお知らせください。

近況報告 プロの作家の新作の発表の場です。採用分には規定稿料をお支払いいたします。

教室案内 DFJ 偶数号に掲載いたします。写真は返却できません。

展覧会案内 随時受け付けます。早めにご連絡ください。写真は後からでも結構です。

●次号原稿締切 1月10日必着

写真の返却が必要ときには、「返却希望」と明記してください。

●DFJ 購読方法

ドール・フォーラム・ジャパン (DFJ) は書店では販売されていません。販売は、会員購読制です。DFJは年に4回:2月、5月、8月、11月に発行されます。初年度会費は5千円、継続会費は4千5百円です。お申し込みは年会費を下記の方法でご送金ください。

◆郵便振替 00120 8 717693 「ユーラシア・ドールズ」(通信欄にDFJと記入)

◆現金書留・または郵便小為替

●継続手続きはお早めに!

今号で会員期限の切れる方には郵便振替用紙を同封しています。継続会員の年会費は4500円です。翌号発行までにお申し込みない場合は、無効となりますのでご注意ください。

●バックナンバー

4号(表紙 吉田良一)、5号(後藤朝子)、6号(四谷シモン)
会員の方は1部1000円です。非会員の方:1400円

ドール・フォーラム・ジャパン第7号 1995年11月24日発行

編集発行 ドール・フォーラム・ジャパン事務局

〒189 東京都東村山市久米川町3-27-57 ☎ 0423-95-7547 FAX 0423-95-7975

編集責任者 小川千恵子

印刷 株式会社 日出島

ドール・フォーラム・ジャパンはユーラシア・ドールズのスポンサーシップにより運営されています。

次号は2月24日発行予定

展覧会DM同封希望の方(個展DMは会員のみ)は2月15日必着
枚数はお問い合わせください

編集後記

DFJ 事務局長 小川千恵子

11月は展覧会ラッシュである。芸術の秋だからと人形関係の展覧会も10月あたりから集中してきて取材をする側としては混乱気味である。そのために、関係の方に迷惑をかけてしまうことも少なくなく、猛省することしきりである。どんなに自分がそそっかしいか、3ヶ月越しで気がついたことがある。実は、毎月同じ日に私が同じ場所に出現することで、会員のひとと話すチャンスをもとうと考えた。CHOTCHAT(チョット・チャット)、つまりちょっとチャット(おしゃべり)という日をもうけ、6号のインフォメーションで知らせたつもりになり、私は毎月同じ日に同じ場所に通った。ところが、毎回誰も来ない。どうせこんなもんさ、とあきらめて今号では中止のお知らせを出そうと6号を取り出したら、チョット・チャットのことなどどこにも書いていないではないか。そうだ、前回入稿ぎりぎりになって他の重要な情報が飛び込み入れ替えたのだ。このことが判明した(思い出した)のが、7号の入稿前日、つまり今日。サザエさんも真っ青であろう。ところで宙に浮いたチョット・チャットをどうするか。実は今号もスペースがなくてお知らせがのせられない。我々がいろいろネーミングなのであきらめたくないのだが、会員の方のご希望があればすぐに開催するので、是非お知らせしていただきたい。

今号では昔人形館の青山氏が新連載を始め、フランスのオークションのエクスペールであるストラウツィスキさんが寄稿してくれた。それぞれの国で人形作家を見守る人がいる。ゲイルのいうニアダのパトロンのような存在を増やすためにも、DFJの充実化を目指したい。頭をかきつつ。ポリポリ。

ユーラシア・ドールズの通信販売
与勇輝の最新写真集

人形師

与	YUKI ATAE	勇輝の肖像
---	--------------	-------

文・構成 米倉 守



小学館

「与勇輝の肖像」

文・構成 米倉守 ¥3800 (送料別)

A4変形判 カラー110頁

*** 与勇輝氏のサインが入っています**

与氏の代表作から「うたた寝」等の最新作まで、与氏の軌跡が集約されています

EURASIA DOLLS

ユーラシア・ドールズ 189 東京都東村山市久米川町3-27-57

tel 0423-95-7547 fax 0423-95-7975